

第2回京都文化芸術都市創生審議会 摘録

日 時 平成18年10月18日(水) 午後5時 ~ 午後7時

場 所 京都ロイヤルホテル 2階 翠峰の間

出席委員(敬称略,五十音順)

西島安則会長,千宗室副会長,麻生圭子委員,井上八千代紀委員,
梶田真章委員,柏瀬武委員,金田章裕委員,坂井輝久委員,鈴木千鶴子委員,
中西進委員,船戸潤子委員,村井康彦委員,吉積巳貴委員,リムボン委員,
渡部隆夫委員,星川茂一委員

事務局

福德久雄文化市民局長,水口重忠文化芸術都市推進室長,南正博文化芸術都市
推進室担当部長,北山俊二文化芸術都市推進室担当部長ほか

1 開会

2 出席委員,事務局の紹介
(略)

3 議事

(1) 文化芸術都市創生計画(素案)について

資料1に基づいて事務局から説明

- ・ 第1回審議会及び個別ヒアリングでお聞かせいただいた各委員からの御意見を基本として,計画素案を検討するためのたたき台としてまとめたものであり,確定したものではない。
- ・ 本計画は,京都文化芸術都市創生条例の,「京都の優れた文化芸術を通じて京都市民と京都のまちを元気付け,京都のまちを新たな魅力に満ちあふれた文化芸術都市として創生する」という理念を具体化するための指針である。
- ・ 本日の御審議を踏まえて,更に内容を充実させ,その後,広く市民の皆様の御意見をお伺いするパブリックコメントを実施し,最終的な計画としてまとめて参りたい。

説明後,意見交換を行った。

西島会長

○ それでは委員の皆様から御意見を頂きたい。

<委員>

○ 条例の趣旨がうまく具体化されている。このような計画は,現状や課題を踏まえないと綺麗ごとだけのものになりがちだが,この素案では現状認識や課題確認がしっかりされているのがよい。総花的ではなく,何をすべきかということに関して,

きちんと絞り込まれている。11ページの図はよくできている。また、論理的に構成されており、骨格がしっかりしている。

注文としては、施策の「再掲」が多々あって、わかりづらいので、索引をつくれれば、もっと全体の事項の整理ができてくると思う。

また、既存の枠組に新しい施策を付け加えるだけではなく、既存の枠組を思い切って再編成するような大胆さも必要である。

<委員>

- 素案全体のつくりについて、「連携」や「仮称」といった表現が随所に見られ、フレキシブルなものになっているのがよい。進め方や内容に柔軟性が保たれている。

課題としては、市と府との関係をどうするのかということがある。素案には、京都府との関係がほとんど出てこない。顕彰の取組など、重複しているものもあり、こういうものを一体化するか、あるいはコンセプトを変えて住み分けを考えるなど、府・市の関係の調整を図る必要がある。

また、国との関係で、国の財力をターゲットにするだけではなく、国の政策をターゲットにすることを考えてはどうか。国は今、「文化風土」を軸にして取組を進めているが、国の政策に相乗りするなど、地域や組織を超えた「超越性」という発想を持つことも大事である。

<委員>

- 教育委員会の事業もよくとりあげられており、連携が図られていると感じられる。京都府の会議にも出席しているが、国民文化祭の京都開催がすごく意識されており、成功させるためには京都市の協力が不可欠である。

また、現在、源氏物語千年紀の取組が進められているが、今の案は「集客」の方向にばかり目が向けられている。しかし、源氏物語が千年読み続けられてきたのは、「文学作品としておもしろい」からである。例えば、京都の高校生に一帖くらい読む機会を作るなど、千年紀に際してビジネス面だけでない取り上げ方を考えるべきだと思う。

<委員>

- 個人のボランティア活動として、京都市国際交流会館で外国の方に日本の伝統文化としての書道を体験してもらおう体験講座を開催している。京都府の国際交流センターにもボランティア登録をしているが、見ていると市も府も同じようなことに力を入れて取り組んでいるようである。市と府が一緒にやればもっと大きな成果が上げられるのと思うことがある。

また、京都には文化ボランティアや「匠のわざ」をもった人がたくさんいる。そうした人たちが活動できる場として、小学校跡地を活用できればと思う。また、文化の発信や外国人の京都の文化体験・若者を育成する為の活動の場にしてほしい。

西島会長

- 跡地の活用を考えると、改めて当時の京都の人々がよい場所を選んでおられることを実感する。貴重な資産として、段階的に使い方を決めていきたい。

事務局

- 素案の第2章1(2)「文化芸術による魅力ある地域のまちづくりの推進」のところで、小学校跡地を活用した「文化芸術によるまちづくりのモデル事業」を挙げている。

西島会長

- 学校跡地の施設としては、京都芸術センターや景観・まちづくりセンターが開設されている。文化ボランティアも、活性化のためには集まる場所があった方がいい。

<委員>

- 面白い内容になっており、私の意見も取り上げていただいている。この計画がいわゆる「絵に描いた餅」になってしまわないように、推進方法のところに誰が何をするのかもう少し明記した方がいい。

市民参加の推進が挙げられているが、現状では仕事を持つ人には参加しにくく、時間のある高齢者等が中心になっている。NPOとして仕事の形で参画できるなど、参加のメリットが明確なら参加が広がるのではないか。例えば素案の中に、暮らしの文化を伝える冊子作りがあるが、このような取組は参加のよいきっかけづくりになる。

西島会長

京都市ではよく出前講座をされている。NPO、NGOにも行っており、まちづくりの取組が具体化したケースもある。

<委員>

- まちづくりの視点からの意見であるが、都市の機能が弱まってきた地域の対策としては、文化芸術による再生が最も効果的である。かつては歩き回るのさえ危険であったニューヨークのタイムズスクエアは、そこで上演される優れたミュージカルを目当てに世界中からやってくる観光客のために、警察や経済界も協力して再生の取組が進められ、今ではすっかり安全なまちになった。

京都には多くの観光客が集まっているが、最も歴史的なものを伝えている中心部には目が向けられていない。その、まちの中心に位置する木屋町は風情と歴史のある歓楽街であるが、昨今、治安が悪化するなどの問題も生じている。

再生のためには性風俗等の規制も必要だが、本来は地域に根付いていた文化芸術が弱まっているのを復活させることが大事である。近年、元立誠小学校を拠点として、地元や芸術家等がまちづくりを進める動きも出てきている。この元立誠小学校

を活用すれば、素案の11ページにある「文化芸術のまちづくり」のモデルとなるような取組ができるのではないかと。ぜひ実現をお願いしたい。

西島会長

- 立誠の活用策については、もうそろそろ結論が出てよさそうである。確かに昔のマンハッタンはひどかったが、スラムが一掃されて今や新しいニューヨークのシンボルである。これからはウエストサイドも復興が見込まれる。参考になる意見であった。

<委員>

- 素案に書かれていること、なかでも「10年後のイメージ」は、実現できたら、本当に素晴らしい。特に、文化・景観・観光を三位一体で進めるという考え方に共感した。

昨年、永観堂であったチェロと声明のコンサートで、はじめて声明を耳にし、感動した。チェロ目当ての観客がほとんどだったが、私だけでなく、予想外に、声明に、みんな心を打たれていたようだった。また、御影堂という木造の建造物が、チェロという楽器の共鳴体の一部になっていた。まさに、文化、景観、観光が一体になっていた。こういった歴史的建造物を使ってのコンサートがもっと増えればと思う。そしてそういった時こそ、その建造物や歴史的背景のレクチャーをする絶好のチャンスである（例えば、訪れる際のマナー、素足は遠慮する、壁にもたれないなど）。単に撮影禁止、入室禁止などと拒絶するのではなく、分かりやすく説明してもらえば、聞いた人もおのずと京都の文化を大切に思う方向に心が向かっていくと思う。

<委員>

- 素案の、子どもたちに本物の文化に触れさせる機会を増やすという考え方に賛同する。私たちも積極的に応えていきたい。先ほど、立誠小学校を文化芸術活動拠点にという意見が出て、私もそのとおりだと思ったが、東山にも閉校した小学校があり、芸術家が発表に至るまでの稽古場として活用するなど、文化のために色々使い道があるように思う。

また、京都府と京都市の関係についてであるが、例えば顕彰制度や文化施設の運営等に関して、もっと協調したり、連携することを考えた方がよいのではないかと。

それから、難しいかもしれないが、祇園や、ほかの花街に伝わる独特な伝統や文化について、計画のどこかで触れることを考えてもらいたい。京都には5つの花街が現存しており、まち中に歌舞練場が点在していることも京都の値打ちである。また、多くの観光客の方が見える東山界限でも、一筋違いと全く違った町並みが続いている。観光地以外にも、歩いてこそ分かるよさが京都にはある。

西島会長

- 大学コンソーシアム京都で開催している京都学講座は入場制限になるほどの人気振りである。また、歩いて廻ることでもっと京都が分かるが、戦中・戦後と時代の中で、雰囲気失われつつある部分もある。

<委員>

- 京都芸術センターについてだが、センターという名前のおり、京都会館など他の文化施設を取りまとめる役割を持つ中心施設なのか、あるいは一文化施設なのか、判然としないと感じている。

次に、観光に見えた方々に、誰が京都について語っているのかということを考えたい。それはタクシーやバス、人力車の方々である。現場の最前線で観光客に京都のことを伝えている、いわば「京都の顔」である人々に、何を伝えてもらうのかということが大事であり、市もその辺りのことを考えてほしい。

また、京都に人材を集める対策を講じて、京都の大学へ来たくるようにしていきたい。芸術系大学の学生は美術館の入場料を無料にするなど思い切った政策を実施してほしい。

<委員>

- 京都は、本当に文化が豊かだといえる場所である。従って、新たにつくり出したる必要はなく、今あるものを活用し、それをうまく情報化して、しっかり情報発信すべきという素案の考え方は理解できる。

ただ、先ほども出た京都府と京都市の役割分担の整理をすることは大事だと思う。

また、これほどの文化との出会いの機会のある都市はほかにない。三条通など市内中心部で文化芸術に関わる市民活動も行われている。その辺の動きをうまくまとめることが、計画なり、この会の役割になるのではないか。

一般的に文化の振興には資金が必要だが、京都は、資金のみに拠らない京都なりのやり方で、例えば、京都に集う芸術家を育てるなど、「今あるもの」を使って文化を伸ばしていくことを考えるべきである。

<委員>

- 全国ネットのテレビやマスコミに働きかけ、文化ボランティアの人たちなどの活動をもっと多くの人に知ってもらうようにしたらどうか。

<委員>

- 京都の文化の蓄積を生かし、景観や観光の取組とも連動させて、更に先に進んでいくという、素案の基本的な考え方に賛同する。

しかし、景観問題について、強い危機感を持っている。いわゆる京都らしい景観を期待してやって来て、実際のまちの姿にがっかりして帰る観光客も多い。素案にあるようなソフト施策も大事である。「時を超え光り輝く京都の景観づくり～歴史

都市・京都にふさわしい景観のあり方～」や「重要文化的景観の選定への取組の推進」が挙げられていることも賛成である。

しかし、もっと積極的に京都らしい景観を維持し、作り上げていく取組を進めることを考えてほしい。

西島会長

- 「時を超え光り輝く京都の景観づくり審議会」において、今後の景観施策の方向性等について議論しているが、現在の景観を本当に京都らしいものにしていくには、なかなか時間のかかる課題である。

<委員>

- 多様な要素が盛り込まれており感心した。文化パートナー1万人構想、アートシンデレラストory事業など、ぜひ実現できればと思う。また、あらゆる場所をアートスペースとする取組が上がっているが、確かにまちなかを歩いていて、「こんなところにギャラリーが」という発見があったり、町家を利用した飲食店の一部が美術、音楽、映画など多様な発表の場として活用されているのに感心する。

しかし個々ばらばらでは埋もれてしまう。例えば、京都文化祭典の中で、まちなかの様々なアートスペースのネットワークを作るようなことができないか。様々なアートスペースが同一タイトルのもとに取り組んだり、京都文化祭典のパンフレットにまとめて掲載するなどすれば、まちの文化活動全体がよく見えて活気づく。

<委員>

- よくまとまっているとを感じるが、全体がまちづくりの視点で書かれているため、文化芸術自体の活性化の道筋が見えにくいように思う。やはり、一つ一つの文化が活性化しないとまちの盛り上がりも生まれてこないのではないかな。

次に、文化芸術の定義に関して、花街の文化や、生活文化、更には祇園祭、京都の新たなまつりである京都学生祭典も含めた「祭り」を計画に盛り込んでいただきたい。また、大学の活力を文化の創生に結び付けることを考えてほしい。

更に、この計画を具体化するためには、財政的な裏づけの確保が重要である。企業の協賛や市民の寄付、そしてそれらを引き出すための課税上の特典など、具体的な対応が必要である。

千副会長

- 元立誠小学校を使って木屋町のまちづくりをという意見があったが、私も同感である。芸術センターがああ場所にあってもいいのではないかなとも思われる。現在、芸術センターは財政的に厳しくてスタッフが不足している。計画によってそうした課題に対しても配慮されるように考えてほしい。

また、京都には文化ホールなどの施設はたくさんあるが、例えばカーネギーホールなどのように、京都に学んだ若い芸術家たちに、「あの舞台に立ちたい」という

気持ちを起こさせるような場があればいいと思う。

11ページの図にはいろいろな要素が盛り込まれているが、実現に向けて優先順位付けが必要である。私は子どもの問題を優先すべきと考える。私たちの世代は、京都の伝統や文化などを学んではいなくとも体験してきたが、今の子どもたちには体験がない。私たちは忘れても思い出せるが、今の子どもたちはそれができなくなりつつある。プライオリティを置くべきはそうした若手層ではないか。

<委員>

- 計画素案について概ね良い評価をいただいたが、素案は委員の皆様いただいた御意見やアイデアをまとめたもので、それらが素晴らしかったおかげである。府市協調や花街の問題、社寺仏閣との連携など、御指摘いただいた点について検討を深めていきたい。また、優先順位の整理は大事なことで、最初に着手すること、3年後、5年後の課題というふうに整理をし、予算化の順序について相談させていただきたい。

西島会長

- 京都の文化的な根強さについてであるが、先日、外国から来た人に、「日本のこころの中には、竹と桜がある。この竹は、竹を割った、というような竹ではなく、どんなにしなっても元通りにピンと立つ強靱な竹である」という御意見を伺った。この竹こそが日本の文化の姿であると思う。かつての明治維新の際、文明開化で日本の文化はひっくり返るかと思ったが、今でも強靱に残すべきものは残っている。また、現在、世界中でグローバル化が進んでおり、文明の衝突やつなぎあいが起きている。その中で、京都では文明をねじ伏せて、文化として輝かせており、これも京都の強靱さの一つであると思っている。

事務局

- 今後、本日の御審議を反映して素案を更に充実したものとし、確定した段階でパブリックコメントを実施し、今年度中に計画を策定する予定である。引き続き、進め方も含めて会長、副会長にご相談させていただき、計画の策定を進めて参りたい。

4 閉会